Osaka University Knowledge Archive

Title	臨床動作法におけるクライアントの抵抗に対するセラピストの治療的対応の実証
Author(s)	原田, 真之介
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61418
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　原田　真之介　）	
論文題名	臨床動作法におけるクライアントの抵抗に対するセラピストの治療的対応の実証

論文内容の要旨

本稿では臨床動作法における抵抗に着目し，その治療的対応について明らかにすることを目的とした。臨床動作法におけるクライアント.の抵抗とは，クライアント.が動作を通じた自己変容をなす上で妨げとなる現象で，抵抗の解決はクライアント.の治療プロセスの展開において意義があると考えられる。本稿では上記の抵抗についての概念的整理を行った上で，それぞれの抵抗の解決に繋がるセラピスト.の援助を明らかにする研究を行った。また本稿ではクライアント.の抵抗をクライアント.の主体的活動の一つと考え，セラピスト.の援助などの外的作用との関連性だけでなくセラピスト.の援助を通してのクライアント.の内的な被援助体験にも注目し，抵抗の変化におけるクライアント.の内的プロセスの考察を行った。

以上の研究実施を通して，臨床動作法の抵抗が場面状況や他者などの外的対象に向けた抵抗と，「意図－努力－身体運動」の動作における主体の内的プロセス内で生じる抵抗に分かれることが考えられた。また本研究で示された抵抗全ての治療的対応が明らかになったわけではないが，痛みや弛めに対する不安による抵抗，動作困難時に反意図的な動作を生じさせて逃げてしまう抵抗，動作困難時に欺瞞的な動作によって課題性から逃げる抵抗，動かそうとする意図や努力に身体が応じない抵抗への治療的対応が明らかになった。その対応とは，セラピスト.がクライアント.の動作体験を捉えて協同的に取り組み，クライアント.が主体的に課題努力を行えるように明確に援助していると，クライアント.側から感じられる援助を行うことが治療的に機能すると考えられた。一方で，セラピスト.の援助が一方的であることや，よくわからず頼りない援助がクライアント.に体験されることがクライアント.の抵抗を増加させることに繋がると考えられた。

以上の研究は，臨床動作法の治療プロセスにおいて非治療的に作用する抵抗を概念的に整理し，臨床場面での評価を可能にする尺度を開発し，さらには一部の抵抗についての治療的または非治療的な対応について明らかにした。これらの研究は臨床動作法の治療プロセスをいかに適切かつ安全に展開させるかについて実証的な知見を提示した研究と考えられる。今後は研究対象を広げ，残された抵抗の治療的または非治療的対応についても明らかにする研究を行う必要がある。また本研究は生起した抵抗の変化に注目し，抵抗が生起するに至るまでの過程には注目されていない。よって今後は抵抗の生起に関連するクライアント.のパーソナリティや心理的特性やセラピスト.からの被援助体験について明らかにする研究を行うことも必要と考えられる。また本稿の心理臨床学的な意義として，クライアント.の抵抗の表現そのものに注目した概念化や，セラピスト.の援助内容と被援助体験の構造的な実証，またクライアント.の抵抗の変化とセラピスト.の援助を通した被援助体験との関連性の実証が挙げられる。以上の知見はあくまで臨床動作法という特定の技法についての知見であるが，クライアント.の表現を扱う心理療法や身体的アプローチを行う心理療法などにおいて重要な知見を示したと考えられる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　原田真之介　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	井村　修
	副 査　教授	釘原　直樹
	副 査　准教授	野村　晴夫

論文審査の結果の要旨

本博士論文では，臨床動作法における抵抗に着目し，その治療的対応について明らかにすることを目的とした。臨床動作法におけるクライアントの抵抗とは，クライアントが動作を通じた自己変容をなす上で妨げとなる現象で，抵抗の解決はクライアントの治療プロセス促進する意義がある。

本論文は、二部構成になっており，第一部は理論編で，臨床動作法の理論的背景，発展の概要，技法，さらに一般の心理臨床における抵抗の問題を概説している。第二部は調査編で，第1章で，臨床動作法における抵抗の概念整理を行い，第2章で，クライアントの被援助体験の概念整理，第3章で，それぞれの抵抗の解決に繋がるセラピストの援助方法を明らかにした。また抵抗をクライアントの主体的活動の一つと考え，セラピストの援助などの外的作用との関連性だけでなく，セラピストの援助を通してのクライアントの内的な被援助体験にも注目し，抵抗の変化における内的プロセスの考察を行った。

以上の研究を通して，臨床動作法の抵抗が，場面状況や他者などの外的対象に向けた抵抗と，「意図－努力－身体運動」の動作過程における，主体の内的プロセスで生じる抵抗に分かれることを指摘した。また，本研究で検討した抵抗は，臨床動作法の実践でみられる抵抗の全てを明らかにしたわけではない。しかし，痛みや弛めに対する不安による抵抗，動作困難時に反意図的な動作を生じる抵抗，動作困難時に課題性から逃げる抵抗，動かそうとする意図や努力に身体が応じない抵抗などに分類可能で，それらの抵抗に対する治療的対応を明らかにした。その対応とは，セラピストがクライアントの動作体験を捉えて協動的に取り組み，クライアントが主体的に課題努力を行えるように明確に援助し，クライアント側から感じられる援助を行うことであった。一方，セラピストの援助が一方的であることや，よくわからず頼りない援助がクライアントに体験されることが，クライアントの抵抗を増加させることに繋がると考えられた。

以上の研究は，臨床動作法の治療プロセスにおいて，非治療的に作用する抵抗を整理し，臨床場面での評価を可能にする尺度を開発し，さらには一部の抵抗についての治療的または非治療的な対応について明らかにした。これらの研究は，臨床動作法の治療プロセスをいかに適切かつ安全に展開させるかについて，実証的な知見を提示したと考えられる。今後は研究対象を広げ，残された抵抗の治療的または非治療的対応についても明らかにする研究を行う必要がある。本研究は，臨床動作法の実践において生じる抵抗に注目し，それを援助者と被援助者がいかに協動的に克服し，適切な治療的体験を共有できるかを検討した点で意義があるものと考えられる。

以上のように，本論文は，臨床動作法の新たな展開に寄与した点で，心理臨床学的に大きく評価される。よって，本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。